

明治文学を語る



明治文学を語る

木村毅

恒文社

〈著者略歴〉

木村 毅 (きむら・き)

評論家，作家，文学博士。

岡山県生まれ。早稲田大学英文科卒。

明治文化の研究に一貫して打ち込む一方，大正時代，中里介山の『大菩薩峠』を発掘，刊行。また，昭和初期の円本時代を開く文学全集刊行の創始者。明治文化研究会会員。早稲田大学百年史編集委員。文学博士。元神戸松蔭女子学院大学教授。主著に『小説研究十六講』ほか多数あり。

1979年9月18日，心不全のため東京・目黒区の東邦大付属大橋病院で死去，85歳。



©1982

明治文学を語る

定価 1,900円

1982年3月30日 第1版第1刷発行

著者 木村 毅

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町3-3

〒101 TEL03(291)7901

振替口座(東京)5-35824

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本

落丁，乱丁本はお取替え致します

I S B N 4-7704-0480-8 C1091

## 序

明治文学の研究は、まさに極盛期に達したのではないかと思う。まだこれが殆ど捨てて顧みられない荒蕪地であった時から、幾分その方面に微力を致してきた私として、欣快の上も無いことだ。

この書は第一部において、明治文学の総体を概観的に語った。

もと或る婦人会から頼まれてした講演筆記をさらに要約して、関西婦人会の機関誌として大阪朝日新聞社から発行せられている「婦人」に連載したので、確か大正一五年の後半期に、ちょうど半力年続いたかと記憶する。

第二部は随時、新聞雑誌の求めに応じて寄稿したもので、この中特に「リットン卿を迎えて」の一篇は、東京日日新聞に掲載せられるや、時の外務省当局の眼に留まり、直ちに英訳の上、来朝中のリットン卿に示された因縁がある。明治文学と外国文学との交渉の討究は、恐らく今後もこうして国際的な文化交渉に何等かの役割を果すことが、ますます多くなってくるであろう。

それから他の諸篇はそうした心配はないが、「日本雜誌興亡史」は雑誌「若草」に、「シエークスピアと明治文学」は同「沙翁復興」に掲載されたものである事を付記しておく。そうでないと文中、理解しがたい一、二句があると思うから。

私は学者でない。特に専門の国文学者とは最も遠距離な存在だ。

だからこの書が学問の殿堂の入場券代りになろうなどは決して思っておらぬ。

素人の研究であるだけに、私のこの方面の著書は従来、暗示的であり、刺激的であるといつて、読者諸君から歡迎されてきた。この書においても願わくばその特徴が、旧に依つて存して置いてくれればいいがと念じている。

明治文学に関する私の著書は、さきに『文芸東西南北』と『明治文学展望』とがあり、昨年と今年とに出した『近代ジャーナリズム研究』と『大衆文学十六講』との中にも、その方面関係のものが数篇宛収まっている。そして今度のこの一巻で、この方面の私の書いたものは、殆ど全部網羅せられた事になる。

恐らくこの書を境界として、私が明治文学に就いて、物を書くことは次第に減じていくてある。私は自分でまた、新たな関心の分野を開拓していききたいと思っている。その意味で自分だけでは、この一巻は、極めて意味の深い区画線になる。

一九三四年 四月二一日

木 村 毅

## 目次

## 第一部

- 一、明治開化期の文学（新文学以前の諸相）……………7
- 序言……………啓蒙期の天才 福沢諭吉……………『かたわ娘』の寓意……………明六社の急進的論策……………
- 戯作者の殿將 仮名垣魯文附 成島柳北……………政治小説と翻訳小説……………
- 一、坪内逍遙と二葉亭四迷（固有明治文学の創成）……………25
- 新文学の暁鐘……………坪内逍遙の功績……………二葉亭四迷……………
- 三、紅葉と露伴と鷗外（明治極盛期の文学）……………37
- 尾崎紅葉……………幸田露伴……………森鷗外……………

四、明治文学の総決算（その全面的展望）……………47

民友社の人々　　文学界の人々　　日清戦争の影響　　・赤門派と早稲田派……………ホト

トキスと明星　　硯友社と紅葉門下　　女学生小説の二傑作……………社会主義小説……………

自然主義の諸見　　漱石と荷風その他……………

五、大正文学の概観（明治文学の遺産）……………65

明治大正両文化の比較　　婦人問題　　人道主義と白樺派……………新技巧派の新思潮同

人……………デモクラシーと民衆芸術……………文壇成金の出現……………プロレタリア文学

第二部

六、唯物史観明治文学ノート……………81

七、日本雑誌興亡史……………97

八、リットン卿を迎えて……………	119
——祖父バルローは我が文壇開発の恩人——	
九、シェークスピアと明治文学……………	127
十、ツルゲーネフの日本文学に及ぼした影響……………	145
十一、『蕪村句集講義』に現われた正岡子規……………	155
十二、漱石の道義観……………	173
十三、蘆花氏に関する断片……………	179
十四、南蛮趣味の小説『長崎の星』……………	189
——百合若伝説は斯うして伝わったか？——	
十五、明治文学研究指針……………	195
木村毅の明治・大正文学研究の質特……………	205
尾崎 秀樹……………	



一 明治開化期の文学

——新文学以前の諸相——



## 一 序 言

明治、大正の研究は、少なくとも昨今最も世の視聽を集めている流行題目の一つであるが、私は今から明治大正文学の誌上連講を始めるであらう。

その前に、なぜ現在の吾々が明治、大正について知るところがなければならぬかについて、一言しておこう。

外でも私の述べたことであるが、現在の昭和時代を自分に譬えると、明治、大正は恰も両親ないしは祖父母のようなものである。自分を知り、かつ現在、未来にこれを十分成長させるがためには、自分自身において初めて創造せられている特性と共に、それが培育された環境、それが伝統をなした遺伝などについても知るところがなくてはならぬ。それは親なり、祖父母なりを究めずには知る方法がない。

徳川期以前は、余りに吾々とは繋がりが遠い。日本が封建の旧殻を脱して、吾々が現在あるが如き近代的国家、ないしは資本主義的社会制度の出発点を切ったのは実に明治に始まる。

もし自分の祖先に関ヶ原の合戦で勲功を立てた人があったと聞かされても、それには単なる歴史という以外の興味は覚えられないが、祖父が若い時にこうしたとか、母が幼い時にこうあったなどと聞くと、現在その人が生きており、あるいは死していても顔を見覚えていただけに、今度は歴史といただけでは決してしまえない生動的な、血の繋がりに生ずる特殊性の明らかに意

識出来る関心をもたないではられない。

明治、大正は吾々にとって実にそれに相当する時代である。そしてなおその上に、この時代は吾々の住むこの日本が経過した中では、最も光輝ある文化の燦然として映発した時代であり、広く世界史の上から大観しても、躍進の迅速さにおいて、奇蹟的とさえ賞讃せられている時代である。それがルネッサンスとか一八世紀の啓蒙時代とか、またわが奈良朝などと相似た研究的魅力を感じしめる。

明治、大正の文芸は、その光輝と奇蹟と魅力とを映写したフィルムであり、その豊富な精神生活の頂上に咲き誇った花だといえ、これを常識として一通り知らなければならぬ理由は、これ以上また縷説の要がなからう。

さて、これが大学の講堂における講義だと、序論の終わったところで多くの参考書を書き並べるのだが、私はそれを、その各項下において適宜に指示することにして、すぐに本論に入ることゝ急ぐ。

## 二 啓蒙期の天才 福沢諭吉

青島戦争の当時であった。神尾大将があつた地を巡検の途中、田舎の小学校に立ち寄ると、支那人の教師が日本の高官をもてなすつもりで、何なりと質問して御覧なさいといった。そこで大将が教壇に立って「お前方は日本で誰が一番偉いと思うか」といって尋ねると、生徒は何の迷うと

ころもなく皆一様に「福沢諭吉だ」と答えた。

これには神尾大将も驚き、付いている武官等は色を失ったという話である。右の話を伝えた吉野（作造）博士は、「支那の子供は或る意味において日本人よりも能く日本を知っている」と論結しておられる。（『公人の常識』四二頁）

この意味が、読者諸君に分りますか？ あるいは恐れる。諸君も神尾大将と同じくこれを驚く仲間ではなからうか、と。

西洋史を読んだ人はフランスの一八世紀に啓蒙時代なる一時期があり、かつまた百科全書編纂の一大事業のあったことを知っているであろう。それは道理を重んじ、迷蒙を打破する上に特色のある時代なり、また事業なりであった。たとえば彼等の一人は、宗教の起原が押しつめれば野蛮人の迷信に発足する事を究めて、不合理と罪惡の巢窟になっていた教会制度に根本的衝撃を加え、宗教を特別に神聖視する時の人の感いを解いた。その同じ精神は当時の国家制度ないしは社会制度のからくり今まで假借なくメスを加えずにはおかなかつた。王や貴族は奢侈淫逸を極め、万民は飢餓に泣いている。この不合理な社会制度は一見鉄壁の如く堅牢に見えるが、実はこれこれのつまらないからくり、つまらない迷信によって保たれているに過ぎない——彼等はそういわぬばかりに、あらゆる不合理を摘発して見せた。だから新興の市民階級が猛烈と蹶起して、王や貴族本位の社会を打破するに至った。これがフランス大革命である。

福沢諭吉は維新の際に、この啓蒙の任に当り、この百科全書家としての仕事を完成した草創期の一大天才である。されば明治時代は、福沢の筆舌のさきから生れて来たのだといつても決して

無稽な誇張でなく、この意味においてこそ、彼は日本で一番エライ人なのである。明治維新と同じような過渡期にある支那の少年が、彼を目して日本の最大の偉人と答えたに少しの不審もない。

彼は独立自尊という事を説いた。人に迷惑をかけて生存しているようではいけない、個々人が十分に独立してはじめて国家も完全な独立が保てる。彼はこう説いた。すなわち祖国の独立を何より希念している点で、彼は非常な愛国者である。しかし個人として独立を保たしめる最大原動力は金銭である。したがって金銭を尊重しなければならぬ。ほかにいかに立派な才能特技があるうと、一身の生存を保つ金銭も得られないようでは独立人といえない。彼はこうも説いた。そして結局は「金」が中心となる経済学なる新しい学問を初めて日本に植えつけた。ところが日本には古くから金銭を蔑視する悪習がある。これは刀を魂とする武士を首班に頂く封建制度の余弊だ。国を閉じて文明をおくらせ、有為な新興階級を、家柄の故に頭を押えて伸びさせまいとするのも、皆この封建制度あればこそだ。よろしくこれを叩き破って海外の新知識を導入し、一般民衆の知見を高めねばならぬ。彼はこうも説いた。この意味で彼は常識の世界化を絶叫した予言者であり、開花の父である。新式の学校を最初に築いたのも彼だ。今日の慶応義塾がそれである。女子の開発にも力を用いた。「新女大学」の著が有力に之を実証する。西洋の文物制度を嚙んで含めるように説いた『西洋事情』の著は、明治新政府が諸事制定の唯一の智慧袋であり、相談役であった。憲法も政府の作る前から雛型を作って国民に示している。西洋流の演説を初めて試みたのも彼なら、雑誌にも早くから著手した。

以上の一筆書きの輪廓だけ見ても、彼があらゆる文明の種子を蒔き、フランスの百科全書家の仕事に似た事を、手一つで成就している事が合点出来よう。

まことに彼は傑れた教育家であり、文明批評家であり、また経済学者、政治家、実業家、ジャーナリストでもあった。

文芸の方面においても彼の貢献は少なくない。単に文章だけからいっても、万人の胸に徹して理解出来るように、草稿が出来上るとまず下女に読んで聞かせて彼女に分らないことは、分るやうになるまで改削した。その位だから彼の文章はたとえ文章体であるにしても、口語と壁一重の所まで接近した平易なものである。「世界は広し、万国は……」で書き始めた『世界国尽し』の著は、最初期の小学校教科書となって世界地理と文化の概念を与えたばかりではない、そのなだらかな七五調は、今日の新体詩の先駆をなすといわるる。しかし私は彼が文学的貢献の中では「かたわ娘」なる寓意譚こそ、見ようによってはもっと意味の多いものだと思うのである。

### 三 「かたわ娘」の寓意

『かたわ娘』は明治五年の出版。今日の雑誌のように組んだら三、四ページにも充たない短い物語である。

大意をいえば、ある富豪に女の子が生れ、他に難はない玉のような子だが、ただ生れつき眉がなく、やがて齒が生え始めてみるとそれがまた真黒であった、乳齒が脱げ代ってもやはり黒

い齒が生えた。近所の者は、眉がないのは癩病の血統だろう、齒が黒いのは祖先が炭団屋でもあって、黒い炭団を高く売り、白い飯を食った天罰であろうなどと蔭口をきいていた。親はそれを直すのに神仏にも祈願し、医者にも頼んだが一向効果がなかった。

しかるにこの娘が二十ごろになると、その評判も全く消えて蔭口をきくものは誰一人なくなつた。というのは、いわゆる「新造」は眉を剃り、齒を黒く染めるのが当時の婦人の風習であつたから、件のかたわ娘も一向目立たなくなつたのである。そして遂に立派な婿を迎えて幸福な家庭を作ることが出来た。

この物語には一体どんな寓意が含まれているのであろう。

太田正孝博士はいわるる。それは当時の時世に一步先んじた洋学者（福沢自らもその一人であつた）の事を暗にいつたものだ。攘夷論のやかましい際だから、洋学者は固陋な愛国家や物の分らない刺客からつけ狙われ、一命の危うきことも一再でなかつた。そこで福沢が、今こそ洋学者のいうことは余り進みすぎているが故に片輪扱いにされる、が、もう少し世の中が進めば、これがあたりまえに思われる日が来るのだという事を婉曲に諷したのだ——と。（『町人論吉』参照）

なるほど、これも一解釈ではあるが、私はそうは思わない。やはり直接には日本の婦人が眉を剃つたり、齒を染めたり、不自然な化粧をしているのを戒め、間接には煩雜な、不自然な封建社会の弊風を突いて、もっと天然自然な制度に則るべきを教えたに違いない。力点をおいたのは二十歳になって蔭口をきかれなくなった所でなく、むしろその出生、その出発が如何に不自然、不合理なものであるかという点なのである。その証拠には左のごとき言葉で物語を結んであるでは